

そほう
組報

かけながわ

No. 2 1989.3.1

身近なお寺の情報誌



撮影者 高以良 等

あさはか
人間ほど浅薄なものはない。いずれも急がなくともよいことを急ぎ、争わなく
てもよいことを争っている。このはげしい悪と苦の渦のなかに、あくせくとして
勤めはたらき、それによってやっと生計を保っているのである。

(仏説無量寿經)

浄土真宗本願寺派

そほう かながわ 第2号

活発に組基幹運動を展開

僧侶・門徒の立場を超えて

● 念願の組仏婦連盟

現在、わたしたちの教団では、信心が個人の内面の問題として現実社会から自らを閉ざしてしまっている現状を反省し、僧侶・門徒とともに手をたげさせて開かれた宗門を目指す運動を展開しています。神奈川組においても昨年、組連研がスタートし、組仏婦連盟が結成するにいたり、いよいよ基幹運動が活発にくりひろげられるようになりました。

● 組連続研修会（組連研）

始まる

門徒推進員、つまりお寺の教化活動の中心となる人材を養成するために、神奈川組主催による連続研修会（全十二回、隔月開催）が開始されました。

この連研には組内各寺院からの門徒代表者六十六名が参加して、六十三年六月十八日の会場宝光寺を皮切りに、今年二月十八日の宝円寺の研修会で、すでに五回が終了しました。

講師団長早島鏡正師、主任藤田恭爾師を中心に、毎回、正信偈のお勤めに始まり、「連研ノートB」にそつた講義、そして法座活動というプログラムで行われています。特に法座活動では眞実の教えを求め、「他力本願では生きて行けない。やはり自力本願でなければならぬのではないか」とか「地獄や浄土は本当にあるのか」などとの問い合わせテーマに門徒と僧侶が一体となり積極的に意見が交わされています。

婦人会の向上と発展に資するため、組として仏教婦人会連盟が結成されました。結成大会は六十三年九月五日、川崎市の高元寺と会館とどろきを会場に、講師に平野俊興師、来賓に三宅富子教区仏婦連盟会長を迎えて行われました。会の名称は「めぐみ会」とつけられ、初代会長には宝光寺仏婦の小原一枝さんが就任しました。大会は、参加者がひたすら聞法に励み、み法の輪を広めぐみ会が結成されました。



* ダーナ＝サンスクリット語で布施を意味する。仏婦連盟では毎年二月の第二日曜日を「ダーナの日」と定め、全国の婦人会が布施行を実践することを提唱。最近では「飢える子供をなくす活動」などに取り組んでいる。

げるために努力することを誓って、終始和やかな雰囲気のうちに進められました。

また後日開かれた役員会では、活動方針に①研修会を兼ねた総会の開催②会員同士の交流を目的とした婦人会訪問③ダーナ*活動の展開という三つの柱が決定されるなど、仏教婦人としての意気込みを感じられ、大いに活躍が期待されています。

即如門主神奈川組 ご巡教の日程決まる

一九八九年五月十七日、十八日

善教寺を会場に 実施

です。

全國五百三十二組のうち、すでに六十三年度で二百四十四組のご巡教が終っていますが、神奈川組では来る五月十七日と十八日の両日、港北区新羽町の善教寺を行事寺院にして実施されることになります。

ご巡教の内容は、式典・帰敬式（おかみそり）・法座・巡回となっています。特に法座では、ご門主臨席のもとに、門信徒との話し合いや寺族との話し合いが持たれるなど、ともに淨土真宗のみ教えを仰ぎ、念佛の輪を広げることへの願いが込められています。

■ 盛大に清來寺本堂修復 落慶慶讃法要

十月三十日、清來寺では老朽化した本堂の修復工事と全面的な境内整備工事が完了し、落慶法要が営まれた。住職、門信徒一丸となって成し遂げた大事業を讃えるかのような秋晴れのもと、稚児行列も行われ、賑々しく厳修された。

■ 僧侶研修会

十一月七日（最願寺）。同朋運動をテーマに開催。講師は東京教区相談員藤沢正徳師。

■ 往生

六月三日、高元寺前坊守宮本ミキさん逝去、八十歳。

十二月三日、東善寺前坊守長谷尾スズエさん逝去、九十六歳。

毎年、神奈川県、静岡県、山梨県の寺院の協力により、仏の子供を育てる目的で開催されているお寺の林間学校。今回は富士吉田市の福源寺を会場に七月二十六日から二十八日までの二泊三日の日程が参加して行なわれた。冷夏で天候には恵まれなかつたものの、お

組の動きをふりかえる

63年度

■ 第十七回南ブロック お寺の林間学校

■ 寺族婦人連絡協議会

六月九日（長延寺）。二月二十日（宝光寺）。組仏婦連盟の結成準備や活動方針などについて協議。

■ 門徒総代及び仏社研修会

六月二十九日（最願寺）。西組法善寺住職山崎龍明師を講師に迎え、「信心の行者について」と題して開催された。

■ 普請

東善寺本堂新築工事着工。

光徳寺庫裡竣工。

善然寺本堂・庫裡新築工事着工。

お寺を訪ねて

(1)

聞きましょう

築地本願寺のラジオ放送

京首都圏都市開教対策本部では都
市開教の一環として、法話を中心
としたラジオ放送を昨年十月十六
日より開始致しました。一人でも
多くの人にご聴聞していただき
たいと思います。

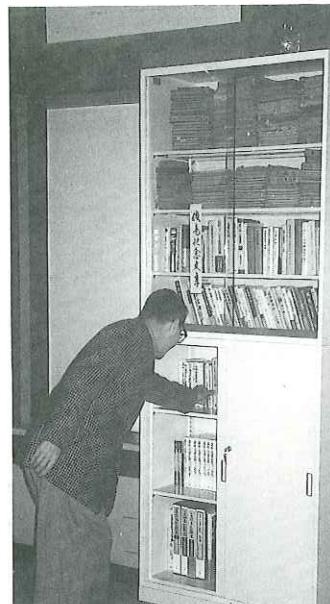
○長徳寺俊亮文庫
港北区牛久保町の山の中、今は
まだ周りに民家の見当たらない造
成地に長徳寺はある。港北ニュ
タウン計画の区画整理で七年前に
少し離れた所から移転。境内建物
のすべてがまだ新しい。

本堂に入る、外陣に置かれた
書架が目に入る。平塚大乗住職に
よれば、先代住職の故平塚俊亮師
の遺産を基金に、「俊亮文庫」と
して昨春に開設されたものだとい

う。同文庫には、印度哲学・仏教
関係図書や古文書のほか、俊亮師
が小児科と精神科の医師だったと
いうこともあって医学書も並んで
いる。また、組内の善教寺住職平
等昭師と宣正寺住職早島鏡正師
の両文学博士からの寄贈図書も多
数収められている。

今後も少しづつ蔵書を増やして
いくそうである。

ご門徒の方々に、気軽に仏教書
に親しんでもらいたいとの願いが、
こういう形となつたわけで、実に
貴重なことである。



読書は人を豊かにする。一冊の
仏教書から、世界は限りなく広
がる。

テレホン法話が

本になりました!!

ラジオ『築地本願寺の時間』
文化放送二三四キロヘルツ
毎週日曜日午前五時十分より放送

小林泰善著『心のもちようで人生
はかわるのか』探求社刊八〇〇円
川崎市の長念寺住職によるテレ
ホン法話(電話〇四四一九一
八二八二番)は、二十四時間いつ
でも聞けるとあって六十年三月の
開設以来とても好評です。話の内
容も毎月一日と十六日に変わりま
す。

このたび、そのテレホン法話が
まとめられて一冊の本になります
た。お問い合わせは探求社(電話
〇七五一三四三一四一二二)また
は長念寺まで。

親指に思う

藤田恭順

今日も○○さんの所へ「月忌参り」に行きました。家中で『お正信偈』をお勧めし、短い御法話の後でお祖母さんが「此の頃、聞いたことはすぐに忘れてしますが子供の頃に聞いた話は忘れられないもんですね」と。そこで「それはどんなお話でしたか?」

もう再び此所に来るような悪いことは致しませんと、誓って押印を押した証拠に切り取られたので閑節が外の指に比べて一つ足りないのだ」と言われた話のことです。いま、高二や小三の孫に『仏様の「み教え」を聞いて、悪いことはもうしません、と鬼と約束をしてきた証拠だよ』と話すと『フーン』とだまつて聞いていました」と話されたのでした。

教えるとなく、教えることが案外聞いてくれることではないでしょうか。

さて、冠婚葬祭、お仏壇等々だんだん派手になってきましたが、カンジンな「ご信心」が薄れてしまつては何の意味も無くなっています。

お仏壇はお浄土の「出張所」。いつも光りの中に摸めていて下さる阿弥陀様のいらつしやる所と、朝に夕にお礼をさせて頂くことです。

ある時、禅宗のお坊さんが「阿弥陀様は十萬億土の遠い世界におられる」と聞くが、どう

話の中で「人間の五本の指の中で親指だけは他の指と違つて関節が一つ足りないがどうしてか、わかるか?」それはなあ地獄の鬼に、

と尋ねると、「それはお寺の縁(側)で遊んでいた時にずっと聞いたことなのですが、お説教師さんの

話の中で「人間の五本の指の中で親指だけは他の指と違つて関節が一つ足りないがどうしてか、わかるか?」それはなあ地獄の鬼に、

たら、「はい、十万億土は阿弥陀様の「本籍」で、「現住所」はここにおられます」とお婆さんは自分の胸に手を当てながらお念仏と共に答えた。と言うお話があります。素晴らしいお答えです。私の胸の中に阿弥陀様がはたらいて下さると、味わうことのできるまで共に聴聞させて頂きましょう。

お仏壇の仏様の後光は四十八本あります。このことは「こうもして待つておるよ」との阿弥陀如来の四十八願のお慈悲になぞらえてあるからです。あの後光はお仏壇の木像や絵像や名号のただ尊い表現ではなく、私をつぶんでいて下さる「お光り」です。いつも傍で、はたらいて下さる阿弥陀様の「お光り」です。

「お正信偈」の和訳に「十二のひかり」では、あまたの国を照します」また「まどいの眼には見えねどもほとけはつねに照します」の「お光り」で活きてはたらいて下さる光りの「真っ只中の私」と氣付かせて頂きましょう。

（宝光寺住職）



お仏壇の
はせがわ

おかげさまで、業界初の株式上場
まごころのご奉仕でお仏壇売上高日本一!

上大岡店

横浜市港南区日野5-1-25

045-844-5740

営業時間 年前10時～午後7時 日曜・祭日も営業いたしております。

川崎店

川崎市川崎区東田町2-1

044-222-7577

わたしたちのお寺です



円光寺 〒210 川崎市川崎区台町4-21
石川 康承 ☎ 044-266-2677
宝円寺 〒210 川崎市川崎区境町5-10
飯田 琢亮 ☎ 044-222-3941
光徳寺 〒210 川崎市川崎区京町1-14-3
林 信順 ☎ 044-333-3997
正樂寺 〒210 川崎市幸区南幸町2-49
佐々木泰博 ☎ 044-522-1961
高元寺 〒211 川崎市中原区宮内715
宮本 義孝 ☎ 044-777-6544
長念寺 〒214 川崎市多摩区登戸1416
小林 泰善 ☎ 044-911-2549
常念寺 〒215 川崎市麻生区栗木203
古市 溪峰 ☎ 044-988-0205
善龍寺 〒221 横浜市神奈川区斎藤分町33
斎藤 幸紹 ☎ 045-491-9431
東善寺 〒223 横浜市港北区中川町1440
長谷尾芳雄 ☎ 045-911-3509
寿福寺 〒223 横浜市港北区茅ヶ崎町1026
多田 晨向 ☎ 045-942-3765
善教寺 〒223 横浜市港北区新羽町2396
平等 通昭 ☎ 045-541-7684
教覚寺 〒223 横浜市港北区新羽町2395
平等 真証 ☎ 045-531-2348
光輪寺 〒223 横浜市港北区下田町3-2-9
村石 恵照 ☎ 044-61-2661

かながわそ 「神奈川組」とは・・

私たちの教団（浄土真宗本願寺派）は、全国に一万余りの寺院を擁し教団独自の地区割をしています。その一番小さな単位を「組」といいます。神奈川組は、川崎市と横浜市中部と北部の寺院によって構成されています。

こころが忘れ去られていませんか……

基幹運動推進委員	教区会議員	副組長	副組長	組長	
一 同	飯 田 琢 亮	藤 江 昭 道	永 野 弥 然	雲 居 隆 昌	
					と も に 考 え る と も に 語 り と も に 聞 き と も に 聞 き と も に 語 り と も に 考 え る
					佛 教 を と も に 聞 き と も に 語 り と も に 考 え る
					淨 土 真 宗 本 諸 寺 派 東 京 教 区 神 奈 川 組

● 読経中は正座をしなければいけませんか？



椅子席でない場合には、正座をするべきです。正座をするとしないとでは自然と列席する心持ちがちがってきます。ただし、足の具合の悪い方やお年寄りは無理をする必要はありません。

仏事のこころえ



最近時々こんな会話が交わされることがあります。
「私の母の七回忌の法事をしたいのですが……」そして、日時などを打ち合わせた後に、「その後お食事をしていただきまます。お経は短くて結構ですから

● 「法事」ととも「食事」?

簡単にお願いします」と。
「はい、わかりました」と返事はいたしますが、実際には、お経は懇ろにそして法話は長めにお話しいたします。法事の中

心は食事で、お経は付けたりでみながするからしかたなしにとすることでしょう。それなら、最初から七回忌の法事はせずに、七回忌の食事（？）をなさればいいのです。

小学生以上のお子さんは、色々騒いでその場にいさせてあげてください。仏さまも僧侶も決して嫌な顔はしません。

ちんと正座をさせてあげてください。そのときは足の痛みしか覚えていないかもしれません、後になれば、「あの足が痛かったときはおじいちゃんの法事だったんだ」と思い出してくれます。

細やかな親切をモットーに

手づくりの団参旅行のお手伝い

ご本山参拝、親鸞聖人御旧蹟巡拝、
中国仏蹟巡りなど、団体旅行の二
とならおまかせ下さい。

ビーエス観光

☎ 0462-33-0887

担当 石井

「車が立往生して、到着が遅れました」だと、「いやあ、今度の仕事には往生しました」なんて、よく耳にしますね。困りはてて、どうにもこうにもしようのなくな

身近にある仏教のことば

「往 生」

つたときに使われるのがこの「往生」という言葉。この語はもともと仏教語なのですが、実はそうした使い方は、本来の意味からすれば誤用といわねばなりません。

浄土真宗のみ教えには、阿弥陀

つまり「往生」とは、文字通り淨土に「往きて生まれる」ことであり、迷いの生存を離れ、永遠の命に生きることをいうのです。

ところが一般には、「往生」が死ぬことと同義に受けとられてしまったり、それがまた転じて、死ぬほどつらい思いをしたとか、行き詰った、なすすべがない、といった意味で用いられるようになってしまったようです。

昔、戦場でつ立つたまま死んでいったお坊さんがいました。御存知、彼のその姿を「弁慶の立往生」といいますけれど、あるいはそんな話も、こうした「往生」の誤用に一役買っているのかもしれません。

◆よりよい紙面にするためにも、皆様からの忌憚のないご意見やご希望をお待ちしています。

仏の本願を信じ念仏申す身とさせで頂いた上には、いつどこでこの世の縁が尽きても、そのときには淨土へ往生し、阿弥陀仏と同じさとりをひらくことができる示されます。

◆最近、「こころの時代」ということばをよく聞きます。しかし、新聞を読んでいますと、「こころ」は何處へいってしまったのだろうと思うような記事ばかり目に付いてしまいます。仏教は、私たちの「こころ」そのものを考える教えです。

◆肝心な「こころ」を忘れていることに気づくこともできない現代人にとりまして、「こころ」そのものを語り合うことは人生に思わず潤いを与えてくれます。

◆私たちのお寺は、仏教とともに聞き、ともに語り、ともに考えることを大切にしています。

◆近くのお寺で法座があるときは、是非聞きに行きましよう。きっと新しい発見があります。

編集後記

◆『組報かながわ』は、川崎市と横浜市北部・中部に点在する浄土真宗本願寺派の寺院が協力して編集している、ご門徒のための広報誌です。

組報かながわ No.2

■発行日 1989年3月1日
■編集発行 浄土真宗本願寺派
東京教区神奈川組
基幹運動推進委員会
〒226 横浜市緑区三保町2440長延寺内



浄土真宗本願寺派(西本願寺)